

桑名港を通じて塩は内陸部へ

西羽 晃

前々回に書いたが、明治 44（1911）年に桑名港へ入ってきた塩は四日市からである。その頃には大型の蒸気船が主流となったが、桑名港は大型の蒸気船が入れないので、大型の蒸気船で四日市まで運ばれて、小分けして桑名に送られてきたのであろう。しかし、江戸時代末期から瀬戸内海地方から直接に桑名へ塩が運ばれてきたようである。『皇帝丸始末記』（1969 年 角田直一著 倉敷市文化連盟発行）によれば、皇帝丸（350 石積、15 反帆、7 人乗り）は備前・通生村（現倉敷市児島通生）の岸本家所有の船で、幕末には各地へ荷物を運んでいた。岸本幸吉は安政 5（1858）年に船中で伝染病にかかり、桑名で死亡して、桑名で葬られたという。

明治になると、岸本一族は皇帝丸を中心として船団を組み、各地へ出かけている。明治になると「皇帝」の文字を避けて「幸帝丸」や「幸亭丸」と称している。明治 15（1882）年 3 月 24 日に味野村（現倉敷市児島）で塩を買い入れ、7 月 7 日に桑名の井上栄治郎へ 200 俵を売却している。戻り船で紀州古座などで木材を積み込んで、泉州堺で降ろしている。

明治 23 年 1 月 7 日に皇帝丸グループの幸久丸は味野村で食塩 1048 石 5 斗を買い入れ、2 月 28 日に桑名の井喜（井上喜兵衛）に売り、125 円 12 銭の利益を得ている。幸久丸はこの年と翌年にわたり 4 回の桑名来航であった。

桑名の住吉神社にある狛犬は明治 28（1895）年に建てられ、現存しているが、その発起人は桑名塩問屋井上喜兵衛と阿波国鈴江村（現徳島市）斎藤梅太郎で

ある。そして各地の寄進者の名前が沢山書いてある。 当時の桑名の通商を示す重要な資料として私は重視している。



左『日本の塩道』付図 (1978年 富岡儀八著 古今書院発行)
右 桑名・住吉神社の狛犬(塩問屋 井上喜兵衛の名も見える)

江戸時代から明治にかけて、桑名では塩問屋が多くあった。狛犬の発起人である井上喜兵衛の他にも、塩栄(平野慶太郎)、塩平(森平左衛門)、塩清などがあり、今一色河岸には塩蔵が建ち並んでいた。瀬戸内などから運ばれてきた塩は桑名の塩問屋が買い取り、さらに木曾三川の上流へ運ばれた。上流の川湊からは木曾谷・伊那谷・飛騨へも馬で運ばれるので、桑名の塩問屋では俵を二重にして、漏れないようにした。

大型汽船の運航や鉄道の発達もあって、従来からの和船による塩の運送も変化し、明治 38 (1905) 年に塩専売法が施行されたので、塩の流通も政府主導となった。

なお狛犬の寄進者名には、徳島市陶器商組合や灰商組合などの名前も見られ、美濃特産の陶器や桑名特産の灰(貝殻を焼いて灰にしたもの)は帰り便に積んだと思われる。